

■ PC 技術伝承への弛まぬ取り組み



宇 治 公 隆*

プレストレストコンクリート（PC）工学会は、前身のPC技術協会の時代を含めると今年で60年を迎える。年齢で見ると私より少しだけ若く、同じ時代をともに生きてきたともいえる。自分の人生を振り返るような気にもなってくるが、高度経済成長、石油ショック、バブル景気、小泉内閣・構造改革、リーマンショックなど、浮き沈みのある日本経済のなかで影響を受けながら、歩んできた60年である。

経済情勢の変化に伴い、PC業界の業績も変動し、技術者数にも影響を及ぼしてきた。PC技術者の年齢別分布は、幾つかのくびれを有する形になっているようである。何が問題か。まず私の頭に浮かぶのは「労働力不足」と「技術の伝承」の2つであるが、ここでは「技術の伝承」について考えていく。すべての年齢層の技術者がそれぞれ一所懸命頑張っている。ただ、現場の技術者構成を聞いた時に、うーん、ということになる。後輩に教えてやりたいくても直属の部下がいない、先輩に聞きたくても上司がいない、かぎられた組織構成のなかで仕事をこなしていくことになりがちである。自分が苦勞したことや創意工夫を工事報告やレポートで伝えられるのが理想であるが、それに取り組む時間と気力が湧くかどうか。その場その場の対応に追われ、後輩にとって興味深い工事の記録は埋もれ、ノウハウも引き継がれずに過ぎてしまうことが懸念される。

そのような問題とも関連し、PC工学会では、昨年、PCアーカイブス準備小委員会（委員長：手塚正道氏）を立ち上げ、PC創成期からの先人たちの苦勞、成果をヒアリングしてデータの蓄積を始めている。今後、常置の委員会として活動を継続する予定である。PC業界各社での技術の伝承はこれからも進められるだろうが、PC工学会が組織立って、伝承していくべき技術の収集・蓄積の取り組みに乗り出したことは心強い。

これからの業界を担う若手の確保も重要な課題である。それは業界にとって切実な問題でもあるが、私の今の教員という立場から大学・高専を見ると、社会インフラとしてこれだけ多くのPC構造物がありながら、大学・高専でPCについてしっかり教えてこなかったことが残念である。

数年前から、プレストレスト・コンクリート建設業協会の皆さんが、多くの大学・高専で、PC技術専門家派遣授業（所謂、出前授業）として毎年1～2回、学生にPC技術の現状や理論などを教授してくれている。教員は何をしていたのか。いまだに、PCはRCの延長線上にあるからということ、コンクリート構造学などの授業の最後に、簡単に説明して終わり、あとは社会に出て上司から学べという姿勢であるという印象を受けてしまう。私自身も少し前まではそんな感じだったかもしれない。

しかし、上述したように、社会でPCが広く使われている現状を知れば、そんな悠長なことは言っていられない。そこで、PC工学会の活動の一環として、会員増加、とくに、大学・高専の教員にPC工学会の会員になってもらう働きかけを進めている。授業の中でPCに関する内容の説明がかぎられるのは、時間的制約だけでなく、PCとの接点が少ないからだと思う。教員や学生にもっとPCの建設現場を見てもらい、身近なものと認識してもらうのが一番だと考える。教員がPCを正しく理解していれば、学生に対して、堂々と、PC技術、PC構造物の説明ができる。その結果、学生は、PCの面白さ、素晴らしさを理解するはずである。これからも地道に働きかけをしていくつもりであるが、教員が腰の引けた対応ではなく、もっと、PCの本質を理解しようとする意欲が感じられることを期待している。

* Kimitaka Uji：首都大学東京 都市環境学部 教授
本工学会 会長